

ホクレン通さず生乳出荷 幕別の大規模酪農家

2014年9月25日

幕別町内の大規模酪農家が自身で生産する生乳について、北海道の集荷指定団体のホクレン（系統）への出荷をやめ、独自に道外の集荷業者（いわゆるアウトサイダー）と販売契約し、今年度から道外に生乳を送っている。飼料価格高騰などで酪農経営が圧迫される中、高い価格で取引する生乳卸を選んだ。関係者によると、管内の酪農家が系統以外の業者に生乳を出荷するのは珍しい。所属するＪＡさつないとの受託契約も解約した。

本州の業者と販売契約



系統から抜け、ＭＭＪと契約した田口畜産

生乳を本州に出荷しているのは「田口畜産」（有限会社＝幕別町日新、田口廣之社長）。同社は総飼養頭数600、年間約5300トンの生乳を生産し、管内でも規模が大きい。生乳出荷量はＪＡさつない全体の４割強を占める。

同社は生乳集荷会社「ＭＭＪ」（ミルクマーケットジャパン、本社群馬県）と４月に全量年間契約を結んだ。ＭＭＪからの融資を受け、生乳を保管するミルククーラーなどを設置。生乳は大型トレーラーに載せてフェリーなどを通じ、全量を牛乳原料（飲用乳）として本州の乳業メーカーに直接搬送している。その量はこれまでに2400トンに及ぶという。ＭＭＪとの契約金額については「言えないが、現在よりは高い。販売額ベースでは年間

で5000万円は違う」（田口社長）としている。

乳価は４年連続で引き上げられているものの、加工向け（バターなど）が１㌔当たり72円46銭、チーズ向けが同63円。飲用向けは１㌔100円を超えるが、道内産は加工向けが多いため酪農家の手取りとなるプール乳価は低い。農水省によると、プール乳価は2013年度で道が１㌔当たり82.4円、都府県は同100.5円と開きがある。

田口社長は「飼料の高騰が続き、経費がかさんでおり、現乳価に不満を持っていた。道外の牛乳原料不足は続いており、生乳を（加工用より）高く買ってもらうことで生産意欲も高まる」と話している。

管内の酪農家からは「現在の販売体系によって安定収入が得られてきた。大変なのは皆、同じ。その体系が崩れると、特に小規模農家は大変になる」との指摘がある一方、「いくら頑張っても品質を上げても、単一価格で販売される現制度に不満はある。田口さんの動きを注目している農家は多い」との声もある。

同社は系統からは抜けたが、ＪＡさつない組合員からは抜けていない。同ＪＡは「契約を解除したのは確かだが、特にコメントはない」（高橋光秀組合長）としている。

道内では過去、独自のブランド牛乳を作ろうと1998年に東戸蔭生産組合（中札内村、４戸）が系統を抜けたことがあったが、2001年の工場閉鎖後、組合を解散し、系統に戻った。